〔特集・小特集，連載（一つを選択し，他は削除）〕

「ながれ」原稿執筆要項（依頼原稿用）

流体力学大学　理学部 　　　　流　体　太　郎\*

株式会社ながれ　力学研究所　　　　力　学　次　郎

Faculty of Engineering, University of Fluid Fluid Mechanics

Instruction for Journal of Japan Society of Fluid Mechanics

(for Electronically-Submitted Manuscript)

\*Taro Ryutai, Faculty of Science, University of Fluid Mechanics

Jiro Rikigaku, Research Center of Mechanics, Nagare Co., Ltd.

Fluid Mechanics, Faculty of Engineering, University of Fluid

\*E-mail : jsfm@rf7.so-net.ne.jp

1. はじめに

　この執筆要項は，日本流体力学会誌「ながれ」の投稿原稿用のテンプレートです．原稿は，この執筆要項に従って作成して下さい．原稿はA4版のPDFで投稿することとし，編集委員会は著者から提出されたPDFファイルを版下原稿とします．言語は日本語あるいは英語とします．以下に論文体裁を記しますが，このwordファイルは要項に則って作成していますので，原稿執筆に適宜お使いください．

1. 原稿用紙

　原稿の用紙サイズはA4サイズとします．上下左右のマージンは20 mmとして下さい．1ページ目は，邦文題目・著者名，英文題目・英文著者名，代表著者E-mailアドレス，（原著論文，解説・総説，研究ノート，談話室のみ原稿受理受付日・英文要旨・キーワードが続きます）を1段組で記し，その下より2段組で本文を書き始めて下さい．各セクションの行間値は3章で指定していますが，基本的にフォントサイズの1.5倍としています．

1. 論文体裁
	1. 邦文題目

　18ポイント明朝体（英数字はTimes）あるいはこれに準じるフォント（このテンプレートではTimes New Romanを使用しています）を用いてセンタリングして下さい．複数行にわたる場合の行間は24ポイントとして下さい．

* 1. 邦文著者名・邦文所属機関名

　邦文題目との間を1行程度空け，9ポイントで著者所属，14ポイントで著者名を右寄せで記して下さい．複数著者の場合の行間は20ポイントとして下さい．代表著者名の右側には記号（\*）を付し，英文著者名の下にE-mailアドレスを明記して下さい．

* 1. 英文題目

　16ポイントTimes体あるいはこれに準じるフォントを用いてセンタリングし，Main Wordsの最初の文字のみを大文字にして下さい．複数行にわたる場合の行間は24ポイントとして下さい．

* 1. 英文著者名・英文所属機関名

　英文題目との間を1行程度空け，14ポイントTimes体あるいはこれに準じるフォントで1行目に英文著者名を書き，その右に9ポイントTimes体あるいはこれに準じるフォントで英文所属機関名を書いて下さい．複数著者の場合の行間は20ポイントとして下さい．

* 1. 英文要旨・キーワード・原稿受付日（特集・小特集，解説では不要）

　英文著者名・英文所属機関名に続いて，原稿受付日が記載されます．1 行空けて，英文要旨を記載してください．要旨は， 200words以内です．9 ポイントのTimes あるいはこれに準じるフォントを用い，行間は14 ポイントとして下さい．また，英文要旨の後に，キーワードを見本と同様の形式で記入して下さい．英文要旨・キーワード部分の左右余白は，本文よりも10mm ずつ多くとって下さい．なお，「特集・小特集」および「連載」の各依頼原稿については，原稿受付日・英文要旨・キーワードは不要です．

* 1. 本文

　1ページ目はキーワードまたは代表著者E-mailとの間を1行空けて書き始め，2ページ目以降は原稿用紙上端から記して下さい．本文は2段組で，段と段の間隔は5 mmとして下さい．10ポイント明朝体（英数字はTimes）あるいはこれに準じるフォントを用い，行間は15ポイントとします．1行の文字数は25文字，1ページの行数は48行程度です．句読点は和文コンマおよび和文ピリオドを用いて下さい．読点（、）や句点（。）ではありません．

* + 1. 見出し（見出しが1行以上になる場合はこの例のようにインデントして折り返す）

　第一レベル（章）の見出しの前後はそれぞれ1行空けて下さい．第二レベル（節），第三レベル（項）の見出しの前には1行の空行をとり，見出しの後には空行を取らずに本文を書いて下さい．章，節，項の見出しともに，見出し番号は10ポイントTimesあるいはこれに準じるフォントの**Bold**体を用い，見出しの文字にはゴシック体（英数字はTimes）あるいはこれに準じるフォントを用いて下さい．

* 1. 図表

図表はそれぞれを記述した本文となるべく離れないような位置に配置して下さい．また，図表内の文字は本文と同程度の大きさとして下さい．図や写真を挿入する場合は，そのための空白スペースを設け，挿入後の配置と対応するようにキャプションを置いて下さい．

　図表の横幅は「2段ぶち抜き（170 mm）」あるいは「1段の幅（80 mm）」のいずれかとして下さい．図表と文書本体の間には1～2行程度の空白を空けて区別を明確にして下さい．図表のキャプションは邦文あるいは英文で9ポイントとし，図の場合は図の下部に，表の場合は表の上部に配置して下さい．表記はそれぞれ，図1，図2…（またはFig. 1，Fig. 2…），表1，表2…（またはTable 1，Table 2…）とし，本文中でも同様に記載して下さい．キャプションが複数行にわたる場合はインデントして折り返してください．

表1 表のキャプションは表の上に置く（9pt）．長い場合はこのようにインデントして折り返す．

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 資料番号 | 高さ*h*(m) | 幅*w*(m) |
| 1 | 1.5 | 2.1 |
| 2 | 1.2 | 3.2 |
| 3 | 1.1 | 2.6 |



図1 小さな図の例（キャプションは9ptで図の下）

カラーで作成された図であっても，著者からの希望がない場合は白黒で印刷されます（オンライン版はカラーのまま掲載されます)．白黒で印刷された場合の品質に注意して作成して下さい．また，カラー印刷を希望する場合は，別途費用がかかります（詳細は投稿の手引き5節を参照）．

* 1. 数式および数学記号

　数式は，

|  |  |
| --- | --- |
| $$　G=\sum\_{n=0}^{\infty }b\_{n}\left(t\right)$$ | (1) |

のように，本文と独立している場合は，本文より1文字分字下げして配置し，式番号は括弧書きで右詰めに配置して下さい．数式は、本文と独立している場合でも，本文中にある場合でも，同じ数式用のフォントを用いて作成して下さい．本文中で引用する際には，式(1)（または Eq. (1)）と記載して下さい．なお，wordの「数式」で入力する場合，式(1)のように罫線なしの表形式にすると総和や積分などの大型演算子を含め縦方向のサイズが自動調整されます．

* 1. 引用文献

　本文末尾にまとめ，本文や図表中の引用箇所には小片括弧を付した番号（上付き6ポイント程度）を記入し，末尾の引用文献との対応を明記して下さい．本文中の引用箇所の表記は，引用文献が一つの場合は1)，二つの場合は2, 3)，三つ以上の場合は4-10)の様に記して下さい．

　本文末尾の引用文献の記載方法は，雑誌の場合「著者：論文題目，雑誌名（欧文の場合*italic*），巻（年）頁」，講演論文集の場合「著者：論文題目，講演論文集名（欧文の場合*italic*）, 巻（年）頁」，書籍の場合「著者：書籍名（欧文の場合*italic*）（出版社, 発行年） 引用頁」として下さい．10ポイント明朝体（英数字はTimes）ある

#1

#2

#3

#4

#5

#6

#7

#8　　　　　　　　　　図2 大きな図の例（この部分だけ段組を1段にしてある）

#9　　　　　　　　　　※ 大きな図がない場合は左の#1～#10の行を削除してください

#10

いはこれに準じるフォントを用い，行間は15ポイントとします．文献には通し番号1)，2)…を付し，インデントして下さい．

1. その他

　最終ページは左右の段落が揃うように調整して下さい．

本書式と著しく異なる原稿は返却します．

謝辞：謝辞は本文の後に置いてください．10ポイント明朝体（英数字はTimes）あるいはこれに準じるフォントを使用してください．行間は15ポイントとします．

付録**1**：付録の位置

　「付録」がある場合は「謝辞」と「引用文献」の間に置いてください．

付録**2**：付録の書式

　付録の本文の書式は付録の長さに応じて，8～9ポイント明朝体（英数字はTimes）あるいはこれに準じるフォントを用い，行間は14ポイントとして下さい．付録の見出しは，9ポイントゴシック体（英数字はTimes）あるいはこれに準じるフォントを使用して下さい．通し番号（付録**1**，付録**2**．．．）はTimes, **Bold**として下さい．

引 用 文 献

1. Cantwell, B. J.: Organized motion in turbulent flow, *Annu. Rev. Fluid Mech*., 13 (1981) 457-515.
2. Pearson, H. H., Britter, R. E.: A statical model for vertical turbulent diffusion in stably stratified flow, *Proc. 2nd IAHR Symp. on Stratified Flows*, 1 (1980) 269-279.
3. Temam, R.: *Turbulence and Navier-Stokes Equations*, Springer Lecture Notes in Mathematics No. 565 (Springer, 1976) 123-135.
4. 流体太郎, 力学次郎: 流体力学とその深淵, ながれ, 1 (20xx) 1-10.
5. Mechanics, F., 力学次郎, 流体太郎: 流体力学の系譜, 日本流体力学会年会20xx講演論文集, (20xx) A101.
6. 流体太郎: 乱流における渦構造 (日本流体力学会出版, 20xx) 1-10.